

東日本大震災の 被災地から

大船渡市末崎町 「居場所ハウス」の試み

Ibashi Japan代表

田中康裕

2007年、大阪大学大学院工学研究科・建築工学専攻博士後期課程修了、博士(工学)。大学院の頃から大阪府・千里ニュータウンにおいて居場所、アーカイブ作りに関する研究・実践を行う。2012年9月より千里ニュータウン研究・情報センター事務局長(～現在)。大阪大学大学院特任研究員、清水建設技術研究所研究員を経て、2013年より岩手県大船渡市において「居場所ハウス」の運営・調査に携わる。2014年よりワシントンDCの非営利法人・Ibashiがフィリピン、ネパールで進めるプロジェクトのサポート・研究を行う。2015年8月よりNPO法人・Ibashi Japan副理事長、2018年10よりIbashi Japan代表(～現在)。

主な共著に『環境とデザイン(シリーズ「人間と建築」3)』(朝倉書店、2008年)、『まちの居場所』(東洋書店、2010年)。ウェブサイトは<https://newtown-sketch.com/>。

■はじめに

「居場所ハウス」は東日本大震災後、米国ワシントンDCの非営利法人・Ibashiの呼びかけがきっかけとなり、2013年6月、岩手県大船渡市末崎(まっさき)町にオープンした(表1)^[1]。建物は米国ハネウェル社の社会貢献活動部門「ハネウェル・ホームタウン・ソリューションズ」の災害復興基金を受け、陸前高田市気仙町の古民家を移築・再生したものである(写真1)。オープン後は高齢者を中心とする末崎町の人々により運営が続けられている。

Ibashiは、高齢者がお世話される側の弱者だと認識されている状況を変え、何歳になっても自分にできる役割を担いながら地域に住み続けることの実現を目指し、次の8理念を掲げて活動が続いている。

- ①高齢者が知恵と経験を活かすこと
(Elder Wisdom)
- ②「ふつう」を実現すること(Normalcy)
- ③地域の人たちがオーナーになること
(Community Ownership)
- ④地域の文化や伝統の魅力を発見すること
(Culturally Appropriate)
- ⑤様々な経歴・能力をもつ人たちが力を発揮できること(De-marginalization)
- ⑥あらゆる世代がつながりながら学び合うこと
(Multi-generational)
- ⑦ずっと続いていくこと(Resilience)
- ⑧完全を求めないこと
(Embracing Imperfection)

「居場所ハウス」はこの8理念をベースに運営している。

筆者はオープンの少し前から大船渡市に移り住み、「居場所ハウス」の運営に関わってきた。ここでは、「居場所ハウス」への関わりを通して教わったことを報告したい。

■大船渡市末崎町

大船渡市は三陸海岸南部の都市で、市の一帯は典型的なリアス式海岸となっている。末崎町は、大船渡市内に10ある町の1つ。2018年12月末時点の人口は4,108人、世帯数は1,516世帯。高齢化率は、2017年10月末時点で38.8%である。

末崎町は東日本大震災で大きな被害を受け

た。死者は32名、行方不明者は29名になる。家屋の被害は全壊606戸、大規模半壊53戸、半壊58戸、一部損壊40戸であり、被災家屋等の合計は757戸になる^[2]。

震災後、末崎町の5ヶ所に計313戸の仮設住宅が建設された。仮設住宅への入居は、震災から2ヶ月が経過した5月11日から始まった。高台移転の進展に伴い仮設住宅は徐々に閉鎖されていき^[3]、2018年3月末に最後の仮設住宅が閉鎖された。

仮設住宅からの移転先には災害公営住宅、防災集団移転、自力再建などがある。災害公営住宅は、末崎町内の3ヶ所に建設。最大のもは55戸からなる「平南アパート」である(写真2)。防災集団移転促進事業による住宅は、末崎町内の10地区に約130戸が建設された。

全ての仮設住宅が閉鎖されたことで末崎町の復興は大きな節目を迎え、被災地から被災地「後」へと移行しつつあると言えるが、その末崎町は人口減少に直面している。人口のピークは1985(昭和60)年の6,077人で、現在はその3分の2にまで減少している。末崎町にとっての平成は、人口が減少し続けた時代

| | |
|---------|---|
| オープン | 2013年6月13日 |
| 住所 | 岩手県大船渡市末崎町字平林 |
| 運営主体 | NPO法人・居場所創造プロジェクト (2013年3月8日設立) |
| 運営日時 | 10時～16時 (事前の予約で21時まで貸し切り利用可) 食堂:11時半～13時半 |
| 定休日 | 木曜 |
| 朝市 | 毎月第3土曜 9時～12時 |
| カフェメニュー | コーヒー(200円)、ハーブティ(200円)、ゆずティー(200円)、ソフトクリーム(250円)など(緑茶・麦茶は無料で提供) |
| 昼食メニュー | うどん、そば、カレーライス、焼き鳥丼、中華飯、週替わりランチなど(400～600円)(事前の予約は不要) |
| 建物 | 陸前高田市気仙町の築60年の古民家を移築・再生 建物はNPO法人が所有、土地は賃貸 |
| 敷地面積 | 966㎡ |
| 延床面積 | 115.15㎡ |

表1 「居場所ハウス」基本情報



写真1 「居場所ハウス」外観

であった(図1)。そして、今後も人口が減少することが予想されている^[4]。

■居場所ハウス

「居場所ハウス」は木曜を除く週6日、10時~16時にカフェを運営しており、コーヒー、ハーブティーなどの飲物を若干のお気持ち料で提供している(写真3)。飲食店や店舗がほとんどない地域の状況を受けて、2014年10月から毎月の朝市を(写真4)、2015年5月からは食堂をスタートさせた。

2013年6月のオープンから2018年12月末までの約5年半の来訪者は延べ約38,300人、1日平均にすると約22.8人で、来訪者数は時間の経過とともに増加傾向にある。来訪者の中心は地域の高齢者だが、学校が休みの日などには子どもが遊びに来たり、親子がイベントに参加したりすることもある。生花や手芸、郷土料理作り、健康体操などの教室が開かれたり、歌声喫茶や会議、食事会などの集まりが開かれたりする時間帯もある。2015年5月に元教員・保育士らが中心となり立ち上げた「わらしこ見守り隊」は、夏休みや冬休みなどに子どもと一緒に昔の遊びをしたり、焼き芋を焼いたり、宿題をしたりする「居場所っこクラブ」を定期的に開いている(写真5)。

1月のミズキ団子の飾り付け、3月のひな祭り、5月の鯉のぼり、8月の納涼盆踊り、12月のクリスマスケーキ作りなど季節の行事

や飾り付けも行なっている。季節の行事や飾り付けは、かつては家庭や地域で行われてきたが、少子高齢化や東日本大震災などの影響で行われなくなりつつある。「居場所ハウス」にはこうした季節の行事や飾り付けを継承する役割もある。

■居場所ハウスから教わったこと

●参加ではなく居合わせる場所

人々の交流を実現しようとする場合、交流を目的とするプログラムを提供するだけでは、そのプログラムに興味のある人や、元々地域活動に積極的な人しか参加しないことがある。

「居場所ハウス」は自由に出入りでき、過ごし方も決められていない場所である。お茶を飲んだり、話をしたり、本や雑誌を読んだり、プログラムに参加せずとも思い思いに過ごせる。

教室や会議、同好会などのプログラムが行われる時間帯もあるが、プログラムが行われている間にも絶えず人の出入りがある。プログラムが行われている隣では、参加者以外の人がお茶を飲んだり、話をしたりしている。周りからプログラムの様子を覗く人もいる(写真6)。「居場所ハウス」はみなが同じプログラムに参加するのでも、それぞれが無関係にバラバラに過ごすのでもなく、思い思いに過ごす人々が「居合わせる」状況、つまり、「別に直接会話をするわけではないが、場所と時

間を共有し、お互いどの様な人が居るかを認識しあっている状況^[5]が実現されていると言える。

ただし、プログラムを提供しないことで自動的に「居合わせる」状況が実現されるわけではない。「何をしに来たんだ?」という目で見られたため来にくくなったという話を聞いたことがあるが、プログラムに参加しない時でも訪れたり、過ごしたりするためには、その行為が不自然に映らないような大義名分が必要になる。運営当番や他の来訪者の対応により不自然にならない状況を作ることも大切であり、また、「居場所ハウス」がカフェを基本とし、食堂を運営したり朝市を開いたりしていることもこの点に関わってくる。つまり、代金を支払って飲食したり、買い物したりすることは、プログラムに興味がない人や地域活動に積極的でない人にとっても「居場所ハウス」に来たり、過ごしたりするための大義名分になる。

たとえ同じプログラムに参加していなくても、互いを認識しあっていることで、緩やかな見守りにつながる。実際に、いつも来ている人がしばらく姿を見せないと、心配して電話したり、家に様子を見に行ったりしたこともある。最初から交流を目的とするプログラムを提供するのではなく、まず人々が居合わせる状況を実現すること。これが結果として多様な関わりにつながる可能性がある。

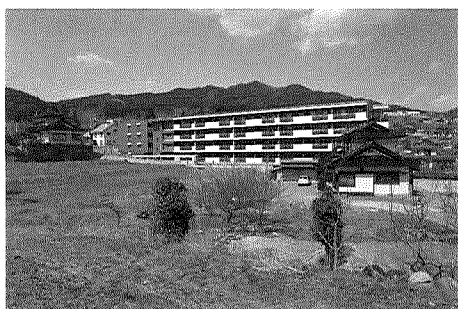


写真2 55戸の災害公営住宅「平南アパート」

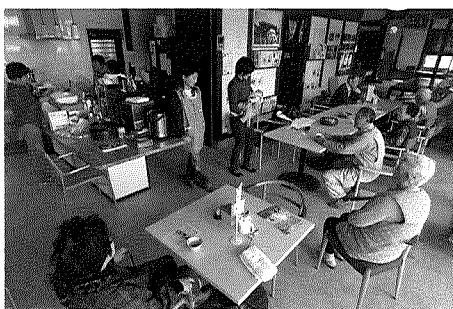


写真3 思い思いに過ごす人々



写真5 「居場所っこクラブ」での焼き芋作り

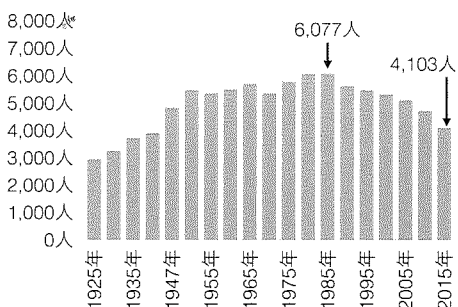


図1 大船渡市末崎町の人口推移



写真4 毎月の朝市は買い物客で賑わう

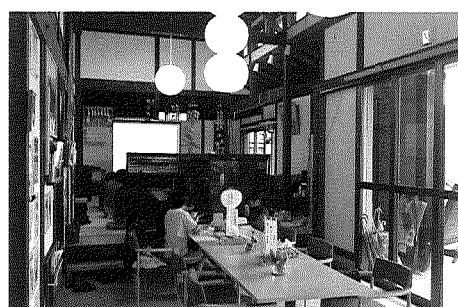


写真6 歌声喫茶(奥)の隣で勉強する中学生(手前)

●仮設ではない場所

末崎町の仮設住宅には集会所・談話室が設けられており、被災地支援の活動拠点や住民の集まりの場所になっていた。

仮設住宅が閉鎖された後、「居場所ハウス」では、仮設住宅の集会所・談話室で行われていた活動が行われたり、仮設住宅の元住民が集まりを開いたりすることがある。この背景には、「居場所ハウス」が仮設住宅のような期間限定の建物ではなく、その敷地は復興が終わった後の地域を見据え、高台移転の敷地近くの土地が選ばれたことがある。

2017年4月から週3回、「居場所ハウス」の運営終了後の時間帯を利用して、子どものエンパワメントいわてが主催する「学びの部屋」が開かれている。「学びの部屋」は震災で学習環境をなくした子どもたちが自学自習するための場所として始められた活動で、大田仮設の談話室や空き住戸で開かれていたが、大田仮設が閉鎖されたため、「居場所ハウス」で継続されることになった。

山岸仮設の元住民による同窓会も定期的に開かれている（写真7）。同窓会は仮設住宅での暮らしを振り返ったり、支援者に感謝したりするために始められた集まりである。仮設住宅は高台移転するまでの期間限定の建物だが、山岸仮設の元住民が同窓会を開き続けていることから、仮設住宅での暮らしは「仮」のものではなく、その後に継承されていくものだということが気づかされる。

●自分たちで徐々に作り上げる場所

「居場所ハウス」がオープンするまでに、1年以上かけて住民を交えたワークショップが開かれた。Ibashoの8理念を共有したり、運営内容や建物について意見交換したり、自分がどのような役割を担えるかを紹介し合ったりするワークショップである。

このような準備期間を経てオープンしたが、実際に運営が始まると、オープンまでに想定していなかったことも含め、様々な課題が生じてきたのも事実である。地域の人々は生じた課題に試行錯誤で対応しながら運営のあり方を決め、運営体制を確立させ、農園での野菜作りや朝市、食堂などの活動を徐々に展開してきた。現在行われているほとんどの教室や行事は、オープン時点で計画されていなかった。「居場所ハウス」の運営はオープン時点で決まっていたのではなく、運営を通して徐々に作り上げられてきた。これを地域の人々が「居場所ハウス」という建物の利用の仕方を発見してきたプロセスと捉えることができる。

注目すべきは、徐々に作り上げられてきたのは運営に関わるソフト面に限らないことである。食堂のために屋外にキッチンを建設したり（写真8）、柱を撤去したり、本棚を増設したり、勝手口や看板を設置したり、板の間に畳を敷いたり地域の人々は様々なかたちで建物内外に手を加え、徐々に使いやすい場所にしてきた。こうした行為により、「居場所ハウス」は地域の人々が「このような場所にしたい」と思い描く姿に徐々に近づいてきたと言える。

●役割を担うことで居場所になる

「居場所ハウス」の日々の運営当番は地域の人々がパートやボランティアで担当しているが、運営当番以外にも大工仕事、花・植木の手入れ、事務作業、子どもの見守りなど仕事の経験をいかした協力もある。郷土料理作り、草履作り、着物の着付け、子どもを対象とする物づくりなどの各種教室の講師は、様々な特技をもつ地域の高齢者に依頼することが多い。

ただし、運営への関わりは仕事の経験や特

技をいかすことだけに限らない。運営当番が調理に忙しい時には食事を運んだり、食べ終わった食器を洗ったり（写真9）、お茶を出したり、薪ストーブに薪をくべたりする人もいる。朝市などで販売するための干し柿作り、クルミの殻割り、椿の実の殻取りなどを行う人もいる（写真10）。

施設ではしばしば「利用者さん」という言葉が使われる。この言葉は丁寧だが、暗黙のうちにサービスする側／される側を線引きしている。「居場所ハウス」では誰に対しても「利用者さん」という言葉が使われることはない^[6]。ここに地域の人々で作りに上げていく場所であることが現れている。「居場所ハウス」において地域の人々は自分にできる役割を担うことで、共に場所を作り上げる当事者なのである。

クルミむき、椿の実の殻取りなどを進んでされる高齢の女性は、「出されたお茶を座って飲むだけでなく、何かやることがあった方がいい」と話す。一方的にお世話されるだけでは居心地が悪く、自分にできる役割を担うことで堂々と居られるようになる^[7]。それが消費や娯楽ではなく、誰かにとって意味あるものであれば、自分が役に立っているという尊厳につながる。つまり、役割を担うことで、そこは居場所になるのである^[8]。

●場所が地域を資源化していく

「居場所ハウス」では大工仕事ができる人、パソコンが使える人、郷土料理が得意な人などに声をかけ協力を依頼することもある。店を営む人に声をかけ朝市に出店してもらうこともある。イベントの時には公民館からテントやテーブル、椅子などを借りることもある。このように様々な資源を運営にいかせるのは、地域をよく知っている人がいるからだと言える。

ただし、あらかじめ資源だと認識されてい



写真7 山岸仮設の元住民による同窓会



写真8 屋外のキッチンの建設



写真9 食べ終わった食器を洗う高齢の女性

ものだけが運営にいかされるわけでない。仕事の経験をいかして大工仕事を担当している男性は「まさか退職後にこのようなことをするとは思ってもいなかった」と話す。農園は休耕地を利用しているが、「居場所ハウス」があるからこそ休耕地が農園にできる土地という資源として認識されたのである（写真11）。災害時の備えとして屋外のキッチン内に設置しているカマドは、地域の個人宅で一部が破損したまま数十年も放置されていたものを移設、修復したものである。このように資源だと認識されていなかったものが、「居場所ハウス」との関わりにおいて事後的に資源として発見され、思いがけず役に立ったということがしばしば生じる。

「居場所ハウス」は、それまでとは異なる観点から地域を認識し直すきっかけになることで、地域にあるものを資源化している。

●地域の外部に開かれた場所

「居場所ハウス」の来訪者の中心は地域の人々だが、地域外から訪れる人々もいる。オープン以来、被災地支援のために訪れた人々により教室や行事などが開かれてきた。国内外から「居場所ハウス」を応援して下さる人々もいる。このように、「居場所ハウス」には地域の人々が外部の人々と接触できる場所という側面もある。

末崎町で暮らし始めて印象に残っていることの1つは野菜や果物、魚介類など非常に多くのおすそ分けがなされていることである。おすそ分けのような現金を介さない互助の関係は、長年にわたる関係の履歴の上に成立している。こうした関係が重要なことは言うまでもないが、関係の履歴の上に成立しているため、時として固定化したものになる恐れがある。外部の人々はその関係の中に容易に入り込めないが、だからこそ、いくつかの既存



写真10 運営当番と来訪者によるクルミむき

の関係の周縁にいる存在として、それらの間を行き来し、結果としてそれらを媒介できる可能性がある。長年住んでいると、その地域の暮らしがもつ価値を当たり前のもので見過ごしてしまうことがある。外部の人々にとって地域の暮らしは知らないことばかりだが、だからこそ、地域で当たり前とされている暮らしの価値を（再）発見したり、揺さぶったりできる可能性がある。地域が外部に開かれていることは、その地域を「相互補完的なかたちで支え」^[9]るのである。

人口減少社会においても幸福かつ豊かに暮らしていくためには、「そのまちに暮らす人の現状に思いを馳せ、未来を案じ、継続的に関わりを持ち続ける人」としての「関係人口」が大切だと指摘されている^[10]。「居場所ハウス」は、ささやかだが「関係人口」を生み出す窓口としての役割を担ってきた。

■おわりに

東日本大震災から8年、「居場所ハウス」のオープンから間もなく6年になる。「居場所ハウス」は、飲食店や店舗がほとんどない地域におけるカフェ・食堂の運営と朝市の開催、仮設住宅の暮らしや活動の継承など、被災地「後」へとつながる役割を徐々に担ってきたが、今後はさらに地域が人口減少と向き合っていくための拠点になることが求められる。

被災地を訪れた多くの人々と同じように、筆者も被災地に対して何らかの支援をしたいという思いを抱いてきた。それと同時に「居場所ハウス」との、末崎町との関わりにおいていつも心がけてきたのは、そこから学ぶこと、学んだことを言語化し共有していくことである。

被災地はいつまでも被災地ではなく、一方通行の被災地支援はいずれ終わる。被災地が被災地「後」へと移りゆく中でなお継続する

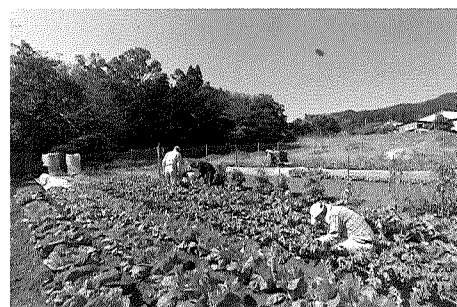


写真11 休耕地を利用した農園

関係があるとすれば、それは一方通行ではない関係であり、学び合う関係はその具体的な1つのあり方だと考えている。

「居場所ハウス」から学べることは被災地支援の方法論にとどまらない。建物により具体的な場所を作り上げるものの可能性という、現在、多くの場面で求められていることである。

（たなか やすひろ）

注・参考文献

- [1] オープンまでに次のような主体が末崎町外から関わった。Ibasho：理念の提唱、コーディネート、ワークショップの開催、国際NGO・オペレーションUSA：プロジェクト・マネジメント、ハネウェル社：建設資金等の提供、社会福祉法人典人会：ローカル・コーディネート、小澤氏：古民家の提供、北海道大学建築計画学研究室：基本設計、有限会社伊東組：施工。
 - [2] 岩手県大船渡市「地区別の被害状況について」2011年6月2日
 - [3] 仮設住宅の空き住戸は被災地支援の活動や支援者などに開放されており、筆者も2013年9月から山岸仮設、2016年6月から大田仮設で生活していた。
 - [4] 国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、大船渡市の2045年の人口は、2015年の人口の約56%にまで減少するとされる。また、2045年の高齢化率は約51%になるとされる。
 - [5] 鈴木毅「体験される環境の質の豊かさを扱う方法論」・舟橋國男編『建築計画論』大阪大学出版会、2004年
 - [6] 「利用者さん」と呼ばないようにするという決まりはなく、自然にこのような状態が実現している。
 - [7] 役割を担うことは、その場所にいる大義名分になるとも言える。
 - [8] 藤竹は、居場所を「自分が他人によって必要とされている場所であり、そこでは自分の資質や能力を社会的に発揮することができる」場所としての「社会的居場所」と、「自分であることをとり戻すことのできる場所」で、「そこにいると（そこに帰ると）安らぎを覚えたり、ほっとすることのできる場所」としての「人間的居場所」の2つに大別している。藤竹暁「居場所を考える」・藤竹暁編『現代人の居場所』至文堂、2000年
 - [9] 広井は「コミュニティ」という存在は、その成立の起源から本来的に「外部」に対して「開いた」性格のもの」であり、「外部とつながる」というベクトルの存在が、一見それ自体としては「静的で閉じた秩序」のように見える「コミュニティ」の存在を、相互補完的なかたちで支えているのではないだろうか」と指摘する。広井良典「コミュニティを問いなおす」ちくま新書、2009年
 - [10] 高橋博之「都市と地方をかきまぜ、「関係人口」を創出する」・内田樹編『人口減少社会の未来学』文藝春秋、2018年
- ・清田英巳、アレン・パワー、高橋杏子、田中康裕、原田麻穂『Ibashoカフェ大切にしたいこと』（2nd Edition）Ibasho、2014年
- ・田中康裕「『まちの居場所』の継承にむけて」長寿社会開発センター・国際長寿センター、2017年
- ・田中康裕『岩手県大船渡市「居場所ハウス」の歩み～プロダクティブ・エイジング実現に向けた先駆的取り組みの考察～』長寿社会開発センター・国際長寿センター、2018年